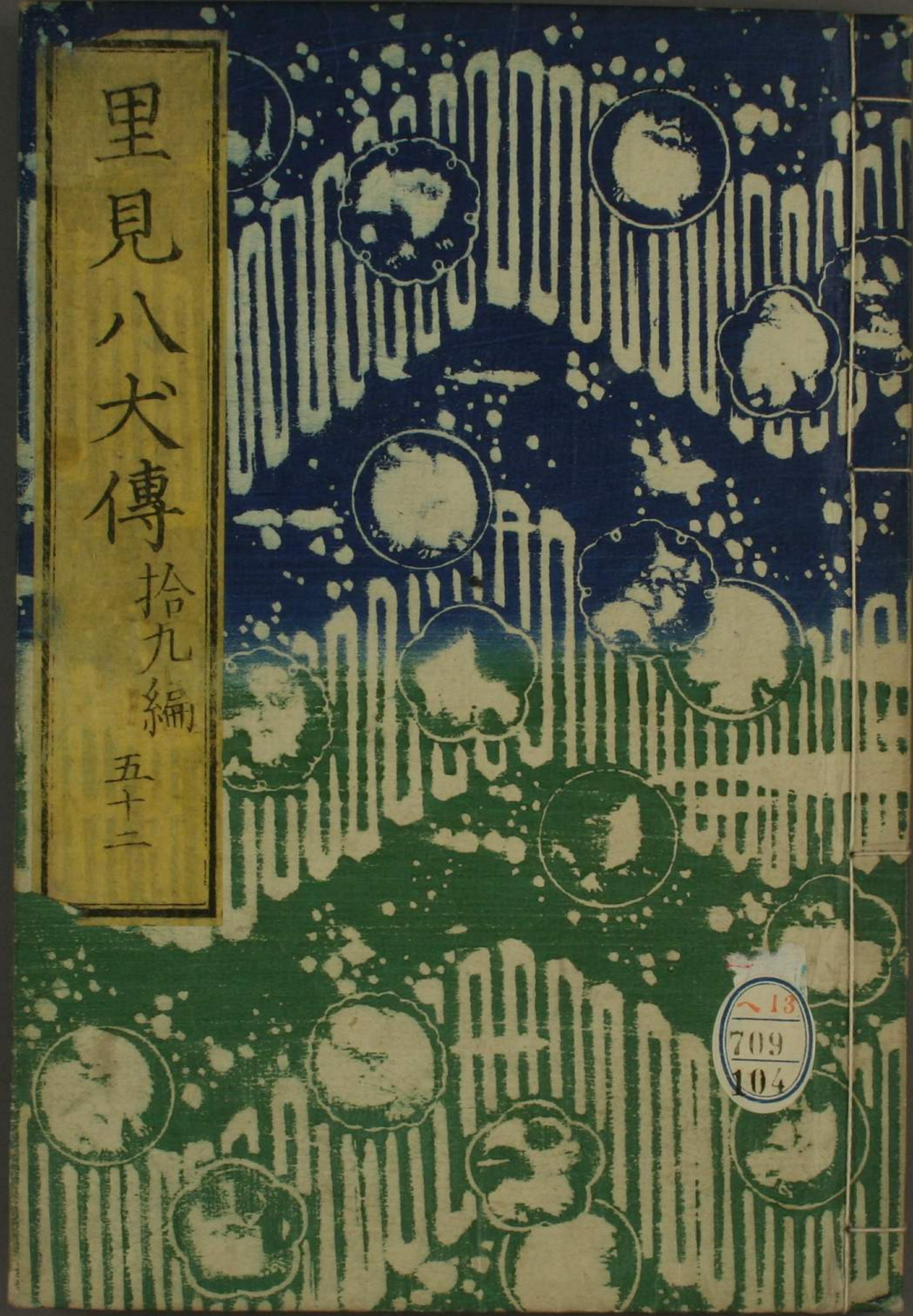




里見八大傳

拾九編

五十二



~ 13
709
104



変ハ礼儀答々然リ（その）思接あり（い）も化石（い）の多ク水土（い）もよれ（い）。辟言（い）那化石谷の
 如ク鼻紙（い）まれ（い）拭まれ其溪水（い）浸（い）ま（い）。二十四日（い）及ぶ時（い）ハ化（い）して石（い）も做（い）
 るを見て知る（い）。又那望夫石（い）の如クハ萬葉集（い）の遠（い）川人（い）松浦佐用（い）媛（い）走（い）
 恋（い）不（い）領（い）巾（い）振（い）り（い）より負（い）る山（い）の名（い）と（い）公（い）歌（い）あれ（い）も恐（い）り古俗（い）附（い）會（い）れ（い）又（い）也（い）。
 海（い）直（い）邊（い）不（い）立（い）る天然（い）石（い）の偶（い）人（い）形（い）似（い）るを見て望夫石（い）の名（い）と負（い）せ（い）し（い）也（い）。
 外（い）ハ唐山（い）も望夫石（い）あり和漢（い）同日（い）の談（い）る（い）。又那張良（い）が下邳（い）の滑橋（い）也（い）。
 六韜（い）三畧（い）を傳授（い）せられ（い）と（い）黄石公（い）未生（い）の人（い）也（い）。寓言（い）の（い）其（い）實（い）る張良（い）
 已（い）が術（い）と神（い）不（い）せん（い）と（い）黄石公（い）と異人（い）を作設（い）く後十二年（い）を歴（い）て其師（い）の
 化（い）して黄（い）石（い）も做（い）り（い）不（い）逢（い）也（い）る（い）と（い）時（い）の人悟（い）び（い）て傳（い）へ（い）く故事（い）も做（い）り
 なる（い）の（い）也（い）の（い）也（い）縦（い）是（い）等（い）の（い）もあり（い）と（い）も求（い）め（い）く（い）也（い）る（い）る（い）ね（い）ば必（い）と（い）を（い）へ（い）く（い）也（い）。
 故（い）ハ聖人（い）の怪力（い）乱神（い）と語（い）さ（い）し（い）開（い）き（い）左（い）まれ（い）右（い）もあれ（い）。狐龍（い）化石（い）事（い）と憶（い）ふ（い）。

他命終（い）る（い）必（い）石（い）も做（い）り（い）と思（い）ひ（い）て石（い）も做（い）り（い）る（い）也（い）。辟言（い）雷（い）霆（い）の（い）際（い）
 たる迹（い）ハ小芥（い）の似（い）る石（い）あり（い）。小鏡（い）の似（い）る石（い）あり（い）。雷（い）斧（い）雷（い）鏡（い）と喚（い）做（い）り（い）る（い）也（い）。真（い）羽（い）
 北越下野（い）を（い）と（い）大風雨（い）の時（い）鏡（い）の似（い）る石（い）の墜（い）る（い）也（い）。土人（い）夕（い）け（い）神軍（い）の矢（い）ハ
 根石（い）と（い）の（い）も是（い）等（い）の風（い）吹（い）賜（い）られ（い）。沙磧（い）の雲雷（い）の氣（い）も蒸（い）れ（い）凝（い）り（い）形（い）も做（い）せる
 の別（い）ハ其石（い）あり（い）不（い）わ（い）は（い）是（い）も申（い）て之（い）を親（い）れ（い）。狐龍（い）の化石（い）も（い）の理（い）も（い）也（い）。他既（い）ハ數
 盡（い）て命終（い）ら（い）ん（い）と（い）時（い）ハ雲雷（い）の氣（い）も蒸（い）れ（い）石（い）も做（い）り（い）墜（い）る（い）と（い）思（い）ひ（い）疑（い）ひ（い）る（い）也（い）。
 故（い）ハ思（い）接（い）の及（い）ぶ所（い）を稟（い）し（い）上（い）の（い）も（い）也（い）。答（い）詳（い）る（い）は（い）義成（い）主（い）の（い）也（い）。大
 塚（い）大江政木（い）等（い）の三士（い）も俱（い）ハ感服（い）を（い）開（い）中（い）義成（い）主（い）の憶（い）も（い）額（い）を（い）拊（い）て（い）大學（い）説（い）り（い）て
 誠（い）ハ好（い）大阪下野（い）ハ智玉（い）也（い）。學問（い）も亦（い）淺（い）薄（い）る（い）ね（い）。我問（い）ハ每（い）ハ其答（い）中（い）ら（い）む（い）と（い）の（い）也（い）。
 乎（い）。然（い）る（い）を（い）又（い）這（い）大學（い）あり（い）。禮讓（い）の（い）も（い）理（い）を（い）究（い）め（い）る（い）也（い）。學問（い）の力（い）も（い）と（い）稱（い）え
 也（い）ハ三士（い）等（い）も御意（い）の如（い）くと答（い）ける（い）。當（い）下（い）大江仁（い）が（い）也（い）。狐龍（い）化石（い）の奇談（い）也（い）。

似されども又一奇談を館に聞かば一向人の噂に傳ふ大禪
師の去歲より延命寺に在りて法務の暇ある時に忽焉とて那地適
に人を知る者あるかの如く事毎老稍久く身隨小衆徒も是を怪
む禪師豫より徒弟念成の教示を以て我方丈に居る時倘火急に
所要ありて我を請ふ欲するが汝本尊を念うまうと連り小鉦をうち
鳴らね然らば必驗ありと我立地おかり来てん奴等疑ひとされ念成則
其意を以て事ある時の教の如く鉦を鳴りて請ふまふ禪師果して
响ふ心と忽然と交る事勤教を就くて常の如く念成等訝りて其
往復する地方を問ふ禪師は合をうち笑ひて開る汝等知る所はわら
後々不至の念悟るやあらとひり有念程の富山の伏姫神の神社に
詣る者時とて那品山嵐の頭雲霧深く起龍て舞れる日もこれあり

又樵夫ある富山に入りて品山嵐の邊を過る折も件の雲霧起龍て品山の
内誦經の聲の響る日もあり又も芥の音木を穿り數金の植立日もあり
これ其人鞍馬に怪しむ人々告るをせり言遂に延命寺へ参りける是は
念成の念成の稍悟るやありて原來師父の暇ある毎富山に造りて品
山嵐の龍のふぞあらむと思へども觀面を問質するにさきかて尚疑ひら
解ざるとも奇事ありと遮莫風聲の響るに虚實を知るべしなりと
禪師の参りて折を問せあり分明らんと言詳に告宣せば成孝も俱
やう其美の臣等もさかど事怪し過るに然しも虚實を測難て宣上ま
ゆらと人の孝嗣も亦さやう臣等の逆旅に在りて其風聲とさきかど禪
師の道德を以て推し時尸解小等して蟬脱の通力とやゆひけん虚談
あらと小衆評を義成主と多し親兵衛が言具也大全が所も亦所

判官成朝の能化院の權僧正影西と小山大夫次郎朝重と使者と
 きて里見と好と結びしが義成も亦、大禪師の大江親兵衛登崎照
 文と相副て結城へ遣しける事の趣の前板百二十九回見えたる如し又
 大乃自の義成の仁義に感服して和順の思ひありとらへども女流るれば好と結
 ぶ不及む只稻戸津衛由元の年の春毎使と大川大田許遣して義
 成王の為ふ千歳と壽延ける是より房總を異めて敢て干戈を動さるる
 四民業と樂とて不孝の子不忠の臣る、畔を者ハ畔と讓り商ふ者ハ
 價と貳せむ路を遠くを拾ひて夜戸を鎖さるる年ハ荒凶なる、饑寒孤
 獨も饑を凍む比皆是義成主の仁義善政の餘澤るれば民の是を仰ぐ
 日月の如く赤子の父母と慕ふ如く然り里見の封内かの如く異なる
 五ハ八犬士者ハ俱ハ休暇の命と為て各其居城ハ在り其内中四犬士ハ稻

村ハ在勤して代るハ半年と以て但年首五節供の拜禮臨時吉凶の
 參勤或ハ事の決りかた折ハ八犬士皆參集ひて國政ハ與りけり、既ハ
 文明ハ十八年也盡く且長亨も亦ハ二三年ハして延徳と紀元
 せらる延徳より又明應と改りぬ嘉吉元年より明應九年ハ至りて星霜
 六十年と歴より、這年四月十六日、結城落城の昔を憶ふ季其基朝
 臣の六十年忌義實老侯の十三年忌小丁るどりてその日義成主ハ早天
 より稻村の城を出て延命寺へ參詣あり、両家老杉倉堀内有司近習の
 每伴當より又八犬士も參會目と既ハ一々廟墓焼香の事果て義成主ハ
 客殿ハ在り住持、大禪師ハ沙弥念成をりて看茶の礼あり、八犬士大塚信
 濃成孝大坂下野瀧智犬江親兵衛仁、大山道節帶刀忠與犬村大
 学礼儀犬川長狹莊ハ義任犬飼現ハ兵衛信通犬田豊後悱順兩

家老杉倉武者助直元堀内雜魚太郎貞住をゆりける折々這客
殿の庭に牡丹花開満て紅白色と交へる香風馥郁とて得ぬれぬ
香弄あるれば義成主の立難て端近く居りつゝ大禪師が法談を
憶む時を程しぬ其語次ふ大のゆづり臣僧當山小住持を
情願のゆるるる恩命黙止かければ既ふ十七八年を麻止り亦肉を如徒
弟念成八年來お作りぬ尚壯年おゆれぬ佛学既小煉熟して法脉を嗣
軍の傳燈の素懐を遂て身の暇を賜らまは欲と言及と饒させぬ
か。と亦他事も多く請稟せ義成空々沈吟とて其情願の今小創を
禪師當山小入院の比老館の諭ひて十稔と契りぬ今今林示ぬ
かゆれぬ我年來疑思由の禪師の身の暇を毎小忽焉とて寺小居
らる留守る念成若く所要あり急小請ま欲する時の本尊とら念

あて連り小鉦をうち鳴せ禪師の亦忽然と寺小かり來ぬあはれぬ
又富山小入る者那品山屈小禪師の經を續聲ゆえ又有一時の木と穿
ら。數金の音する日も是ありあはれぬ其形體をを我其嚙とせと稍久く
るりぬれどもよ折るれば問がらぬあはれぬのねむと問れて大の敷馬く色
る。然ん且始より稟上ん臣僧祝髮入道せしり施王の敷待おあはれぬ
敢亦火食せむ日毎小蔬菜果子と生食して只水と飲の願ふ所伏
姫神の御菩提と當家の御子孫敬奉昌と祈ると間断る。よの故小身の
當寺の方丈小在り心の富山の品山小在り約莫かくの如くふま喜怒哀
樂の境を免れ榮枯得失好憎褒貶小掛念せぬ我身の有と忘る時
ありあはれぬとて欲する地方あはれ忽焉とて適する。還る欲まらぬ
忽焉とてかへららるる。然ればとて脚地と踏まを雲小駕らふあはれぬも出



八代将軍徳川吉宗

義成延命寺



義成延命寺
 の書院
 丹を觀ふ

八代将軍徳川吉宗

義成延命寺

彼思ひの隨るは是何等の所以なるや。我のまじき是を知らず。我知らざれば
 自在なるに那世と厭ひ山に入りて遂に形と煉り性と易て品居水飲修
 して神仙の倣ふ者不似たり。但神仙のまじき佛も亦雲不駕り。波と踏む
 法術を重んずるより佛を稱て金仙とを開け左も右もあれ臣僧出沒自由と
 疑はれ立地不悟り。人召時へ遠くも寄るや念成が誦ふ
 とありく鳴き鉦の富山ありても我耳の入れり壁を唐山魯の曾參が至孝
 するや日暮るまをかへざる時其母俟不樂て則門不立出て望む指を
 噬時曾子の胸忽地痛て母の待とを知る故のぞ死て入り來ぬが如し
 蓋念成が老實なる師の仕方の誠心の鳴き鉦の幽冥に通まは
 るべし世の神佛を祈る者利益其人の至誠深信在り誠の必神の
 如し那鉦念成が鳴き鉦ありて遠く我耳の入るとは是其誠を知る

べの。少の往る文明十六年の冬。這白濱の波濤の打寄ける異圓
 材あり其材の周匝十圍許。長一丈五六尺。其色黒くして香氣あり
 聊削合て焼試る疑ひもる沈る。臣僧則木匠の課て其材を
 斫せ分ちて五十五材とを是を富山の品山崖に藏めり。あれども人は是を知
 らず。是より後臣僧暇ある毎に飄々然と富山の崖に造りて旦夕の
 姫神の奉為し讀經をなす。晝の則其材を刻て須弥の四天神王を作
 せたり。又二十五の菩薩と二十五の古佛を為り奉て其餘材をりて數珠
 一聯を刻り。約莫這細の歲月十餘年。稍落成仕りぬ是を當
 寺を彫刻せざるの寺内も尚俗氣あり。今の法師の寂滅為樂の教と思
 へで富貴利達を願へり。又富山の神崖に詣る者も樵夫も臣僧を見る
 ことなき況刻做する佛像あるを知らざる。雲霧發起龍と依りあはれ其

人々の凡眼汚穢れて。視ども見るとも。既ゆて古佛諸菩薩五
 十體の開眼。あまらう。かども四天神王の。開眼と。ゆを。這ま不。就て。八大
 士等の。商量ま。思ひ。其美。及。不。し。館。向。れ。ま。ら。う。か。が。憶
 む。辯。仕。の。佛。像。の。尚。神。處。在。り。數。珠。の。當。寺。の。什。物。小。せ。ま。う。思。ひ
 念。成。お。取。せ。ら。れ。疑。々。思。召。ま。御。臨。見。お。入。れ。亦。開。せ。と。い。を。念。成。お。め。り。て
 身。と。起。し。う。數。珠。櫃。ま。ら。數。珠。と。會。お。基。蓋。お。載。て。義。成。主。お。見。せ。ま。ら。う。と
 ろ。の。ま。ま。ま。小。會。お。ま。ら。異。香。一。室。お。満。み。ち。が。義。成。主。の。妙。小。奇。に。其。言。と
 聴。く。の。ま。ま。ま。數。珠。の。異。香。お。敬。馬。に。感。ん。て。や。と。ら。ら。ら。小。會。ら。う。ち。戴。だ。て。後。方。の
 儀。の。一。禮。儀。と。見。ら。う。と。や。大。学。汝。が。昔。年。の。辨。論。も。當。ら。ら。ら。小。あ。ら。ね。と。
 禪。師。の。直。話。の。叮。寧。ま。ら。う。疑。心。を。解。お。足。れ。り。是。見。よ。か。と。渡。の。小。數
 珠。と。禮。儀。受。戴。だ。て。御。誑。の。如。く。禪。師。の。道。德。神。通。自。得。の。妙。要。の。這。數

珠。の。猜。せ。ら。る。昔。年。臣。等。が。云。う。と。推。量。せ。一。疎。ま。心。裡。恥。お。ひ。と。合。て。躬。く
 件。の。數。珠。を。自。餘。の。大。士。お。遞。與。し。て。見。ま。れ。孰。く。感。嘆。せ。ら。る。元。由。負。住
 も。俱。小。奇。異。の。思。ひ。と。做。し。て。數。珠。を。念。成。お。返。し。け。り。當。下。義。成。主。の。又。大。小
 う。ち。向。ひ。て。喃。禪。師。這。ま。不。就。て。八。大。士。何。ぞ。の。商量。あ。る。や。ら。と。問。は。れ。大。小。合。て
 小。ま。否。別。議。お。ひ。ら。伏。姬。上。の。御。紀。る。那。水。目。の。數。珠。の。も。役。初。者。の。靈
 物。を。お。救。ふ。後。に。至。り。て。凡。僧。の。も。お。落。ま。ら。う。這。故。に。那。數。珠。百。顆。の。玉。を。お。と。
 五十體の佛像の玉眼お付けぬ其等識の八箇の玉と大士おとて須弥の四天の
 玉眼おせまう欲志開眼遂お具足せぬ臣僧又宿願あり件の須弥の四天神王を
 當國安房の四隅お瘞めて最も畏れ平安京る將軍塚お擬へる十世の李
 ま。で。動。だ。る。に。當。家。御。子。孫。の。為。お。守護。神。お。做。る。今。又。二。千。五。の。古。佛。二。千。五。の。菩
 薩。の。御。封。内。當。國。る。鋸。山。お。安。措。し。て。堂。と。造。ら。せ。并。お。儘。小。分。ち。て。件。の。山。お。瘞

此是佛種を執するの義之臣僧嘗鋸山を相まふ正は是房總第一番の
 佛地今如の如く做す時の二百年の後に至りて我座ゆる種佛五十二體
 倍せり五百の石佛を造り立て伴の山措者あらば後未知るべし
 果し速小身の暇を賜りて富山入りて終を俟ん這義の館小宗上るの
 らざ犬士達も皆昔年水陸施餓餓の折各所藏の靈玉を我返さんと
 去る我這宿願ある故代る至羅龍の玉をりてせり余る其羅龍の玉の
 去る金蓮金花と做りて散乱して消滅する今按ぎる蓮の其字押
 車小従ひ走小従ふ輪回車の回る如し別是當館の仁心善政の積徳
 恩怨忘報の輪回正不盡るの兆るべし又各所藏の靈玉仁義八行の文字
 道廢れて仁義起ると是人所云大道に至仁至善人至仁至善れば不仁不善

と名くべ死者る大道廢れて不仁者あり惡人あり於是乎聖人仁義礼智
 孝悌忠信の八行を立てて人小教人を教言めり和殿等八犬の俱八行具足此
 人何ぞ其文字の見れる靈玉の眞助の負人や縦其玉あり各八人の一
 生涯の姫神看番永あふ目今玉を我返しねり四天の玉眼みせん古俗
 良將の勇臣の殊不勝れると四人擇て是を須弥の四天小擬へり四天王と
 稱する者其も所云源頼光朝臣小従事せる衛府の勇士渡邊綱阪田
 公時ト部季武碓氷貞光是は這他源義經主の勇臣龜井片岡伊勢
 駿河義貞朝臣の勇臣栗生條塚畑巨利皆是人の知る所故擧る小追中
 必然る當館の那四天王一倍せる八犬士の賢臣あり這八犬を四箇小約めて四
 天の八目と做す時の八犬中て四天の天の八目小従ひ大八犬大八犬小従
 ひ小従ふ八犬中て四天と做りて永久當家の鎮守と爲抑亦よくと

辨論精細るのければ義成主と首也。諸大ニ家老感服して異議者者も
 る多ける。升が中不戌孝胤智仁者も自ら今師父の教諭成就して思ひ合は
 事ア七ひ人臣も感得の靈王の生平不護身囊小藏ゆるる月望毎
 合ふ中不拜まの。余る昨日の如く申して拜まゆるも幾の程も文字の耗
 故の白玉不作りけり。升の臣等三人の玉の三をこの這美を自餘の犬士未向ふ道即
 大學莊双現八豊後等が藏ゆるも皆白玉不作りぬと。告れ現八找と出
 又只玉の文字の三を臣等八人が身不在る瘧子の形状牡丹の花不似し。ゆ
 隣國和睦の比より其瘧子年々薄く做る隨ふ本月不至りて皆銷耗
 迹る。做りぬ然ども義兄弟等が瘧子の或の脚或の肋背殿肉股射るも在
 故の衣は隠れて人不知れ其身の中見えざるがあれも臣等が瘧子の面部不
 美入のゆえ鏡と照せば。かく見るか。是は御覽せよ。此類と示せば。義

成王の、大師弟も直元貞住に至るまで左見右見々俱小の。現の大飼の
 面部の瘧子の近曾薄く做りぬ。既にして銷耗し心つ死るゆえ自餘れ
 諸大も恁ぞの奇く妙なるふと。又忠與礼儀義性悌順の膝と找を
 言語齊一答るや。事と物其因果あり。因の始に果の終あり。我々が玉の文字と
 身不在る瘧子の。則是因に尙ある玉と瘧子あり。何をて伏姫上の瘧子と
 知る由あり。這面箇の照据あり。當館不徴使れて功名共不做。後玉の
 文字も身の瘧子もあまを做りぬ。是果は這奇事の終る玉不疵あり。人の瘧子
 あり。垢清白とま。誠の佛法音聖の方便役行者と伏姫神の利益狄造
 化の小兒の所為狄思議ま。甲一句乙一句送不語と續。意市衣と演。
 各玉の命多。護身囊ふら載て俱不。大不返下けり。當下義成主忻然と
 大士もふうち向ひて。現の物も本末あり。事不終始あり。我今日這牡丹亭小東て

汝等が身在る所の形状牡丹に似たり。瘧子の皆銷耗し正可不知ぬ。其
 瘧散て這花もも感応とらふべし。就て我這年来情地不疑ひ思ふ。あつた
 阪下野の智王をれば必や知る由あり。といえて瀧智額を擲て開け何事かといひ
 義成主合笑て然るに。汝等八箇の身在り。瘧子の形状牡丹の化に似たり。
 原是八房の犬は毛色は類りたるべし。那大い白は黒は雜毛八箇あり。形状牡
 丹の花に似たり。當時我老館の是は名けて八房の犬と喚做し。是は八總
 とのりて八房と寫せあり。亦是所以あり。房も總も和名をさへ。其房も並
 屋もあつて。婦人の乳を乳房と。其兩箇相並べて總の垂るに似たり。又蜂
 巢と蜜房といふも亦垂る總に似たり。あつて和訓總と房と通用し。但し這
 字義あり。まふは牡丹と古造大皇國あり。延喜天曆の比は。渤海國の
 商船創て載て來りければ牡丹の和名とさへ。まふは。渤海の假字と崇

徳帝の御時より牡丹の歌あり。且牡丹は極寒の地不宜し。かゝる東南温暖
 地方に相応し。と云ふべし。當時詔して其根を紀伊伊薩麻呂安房植を
 る。是より後延々分根して今に諸國に多くあり。然るに老館是等の故
 事と思召合さず。八房の名は出来し。我少かり。時御説を兼りて是を知り。
 然るに世の生文人の這深義あり。知らねば。教不賢して八房と改む。八總と作
 る。ある老館の御本意不あらば。開け左も右もわれ。那八房の犬の雜毛の形状
 牡丹の花に似たり。是甚麼なる因縁也。且汝等八人の瘧子の他は類り。と
 ても又皆牡丹の花に似たり。必其由あるらん。這義を解はねば。と問れて
 瀧智沈吟して御説兼り。いへ。其美の臣等不用意也。と考ひ。縦
 此の考證あり。事比皆臣等義我兄弟の身係り。る隱微は。信は。思ひ。心
 正なるべし。大禪師の悟道の後疑し。此事あれ。神物あり。告るが如く。方

發明とされしものハ曾てのハ分明なり。大の推林がめく大阪漫
語をる稟一と和殿は是生智之何もの知らざるあり。酒家小讓はとわいと
推辭を義成王宮あまき。まのて禪師下野が智玉も知らざるを知らばとま
是則上智之曲学者の知らざるも知らばとわいと強々臆説を傲ま
故ハ胡慮ふるると言ふ。禪師の只是神識之何を一言一句と惜ま。我の言
らば世の人ハ疑を解ざるやと微ふ。大の阿と心て姑息して答ふる。仰宣ふ
理り之那八房の犬の死も又八犬士の出身世の皆臣僧より出づ。それハ件の隱
微と鮮ん。必人小讓る。然と漫ハ推辭ハ衍り。今臣僧が一解ハ伏
姫神の教ハ依れり。徐小聞ハ食ねか。と謝して則解ていさ。大嘗本草と
按ざる牡丹ハ牡丹。這故ハ宿根より叢生を因て名けて牡丹と云ふ。是ハ由之
之を見れば牡丹ハ皆牡丹のてりて純陽の花也。又八房の犬ハ其母犬死して狸

見ハ乳育れる牡狗也。生涯對まは牝狗をぬき。是ハ亦純陽の畜生也。之を
之那身の雜毛形狀牡丹の花ハ似て其數ハ八あり。八ハ則陰數の終也。陽中ハ
陰ハ十ハ一通ハ故ハ陰數の終とまは老侯這大を八房と名け。ゆいハ後竟ハ八
犬士也。安房ハちあり。聚ハた識ハ又八犬士各其父母あり。と云ふも那宿因ハ推
ま時ハ伏姫上の御子也。胞兄弟ハ同ハ約莫這八個の弟兄ハ皆男子也。純陽
る。且各身ハ在る所の痣子形狀牡丹の花ハ似る。那八房ハ類する元自亦是弟
兄純陽の義を表せ。てあられも陽ハ獨不立陰ハ獨不立。故ハ大阪大塚ハ
幼外ハ時より故あり。俱ハ女裝して名も亦信乃毛野也。女子ハ似る。亦是
陽中の陰也。且大塚ハ濱路と云。結髪ハ少女也。又大村ハ離衣と云。賢妻也。
則是陽ハ獨立するの義也。小ハ濱路離衣及大江ハ母沼瀧ハ比良是良善
心烈ハ婦人る。非命ハ那身と殺せ。ハ果報虚不似。これハ亦故あり。

たゞ、まうのく、たるに、たのむと、かすべ、
壁の草木の花開てお小実を結むる時、必先虚花あり、
後実花あり、（その心烈く自實する）
実花あり、（その心烈く自實する）
名を千載の後、（その心烈く自實する）
既、（その心烈く自實する）
昌、（その心烈く自實する）
ひて、（その心烈く自實する）
表、（その心烈く自實する）
小中大の三乗、（その心烈く自實する）
舌水の流る、（その心烈く自實する）
嘆の聲、（その心烈く自實する）
玉の文字の耗、（その心烈く自實する）

つ、（その心烈く自實する）
又別、（その心烈く自實する）
異、（その心烈く自實する）
家僕、（その心烈く自實する）
其香、（その心烈く自實する）
銷耗、（その心烈く自實する）
廿六、（その心烈く自實する）
授、（その心烈く自實する）
干戈、（その心烈く自實する）
世の常言、（その心烈く自實する）

八代傳七郎義光三十一
十五

ひめめ 非命の者る。蒲團の上を病臥者。姫神何を能く。神薬と授けんや。
是非由てを觀れ。愛と死祥ふひと祝せ。大士等二家老も俱に千歳を
唱ける。當下義成踞然と謝して答ふ。我身素より薄徳るれども。倘禪師の
如く。實に幸甚。却須弥の四天塚へ。則禪師先達。八大士を總
轄せ。又鋸山植ると。種佛五千軀。政木大。全江田宗。及皇。下知て。又
く。支役を出さ。死然と向れて。大い頭と掉て。否然る物々。は事。の要。を。那。里
へ。念。成。と。支。役。十。四。五。名。を。事。足。る。べ。種。と。植。る。少。壯。兒。を。宜。と。老。人。の。植
たる。及。發。生。為。死。者。る。べ。却。這。事。と。果。一。念。成。の。當。山。の。住。持。を。仰。付。さ。せ
ぬ。ひ。て。臣。僧。の。速。身。の。暇。と。賜。る。べ。願。ふ。を。義。成。主。の。時。て。開。を。左。右。を
異。日。制。度。せ。ん。長。談。日。の。蘭。を。卒。退。え。と。立。の。八。大。士。二。家。老。の。伴。の。士。卒。と
促。聚。合。て。稻。村。の。城。へ。俱。一。の。休。而。有。司。奉。り。て。四。天。を。斂。び。死。素。樸。の。厨

子と石の韓榎佛像五十軀と斂ひ。小瓶を石陶の玉面を課する。約
莫。三。日。許。し。て。送。り。作。り。出。せ。ば。大。禪。師。の。念。成。を。將。て。八。大。士。と。共。侶。の
許。の。支。役。を。從。り。富。山。の。岳。嶺。へ。赴。て。大。禪。師。の。作。立。て。開。眼。考。へ。四。天
佛。像。と。半。多。る。其。佛。像。五。千。軀。の。念。成。則。受。會。て。准。備。の。瓶。斂。り。車。を。登
志。支。役。の。推。さ。を。延。命。寺。へ。か。り。多。次。の。目。四。五。個。の。徒。弟。と。俱。し。支。役。の。又。其。車。を
推。さ。を。鋸。山。と。投。て。死。せ。り。介。程。の。八。大。士。の。須。弥。の。四。天。神。王。の。木。像。と。四。箇。の。長
榎。の。斂。り。先。隊。配。と。定。む。東。方。へ。大。塚。大。江。西。方。へ。大。川。大。飼。南。方。へ
大。村。大。田。北。方。へ。大。阪。大。山。各。支。役。を。從。り。立。別。れ。路。次。の。を。大。一。人
岳。嶺。と。出。大。士。等。不。告。て。念。成。鋸。山。へ。赴。け。明。日。より。寺。に。留。守。す。
酒。家。の。這。里。を。祈。禱。して。白。濱。へ。還。り。て。各。々。勉。め。其。四。天。の。玉。眼。の。和。殿。の
感。得。せ。り。靈。玉。を。り。て。造。り。か。ば。是。各。分。身。の。善。神。の。相。同。と。開。と。瘞。る。地。方。也。

酒家豫表と建ち。其地を穿り一丈二尺は是地枝十二生肖の象る塚と
築くと十尺より一尺は是十幹の象る四天王の配分其東西南北を分ち長
櫃不寫り塚の表の東に柳西に楓南に檜北に冬青を栽ると好とを努む
ちと説諭せ大士等都てあるて各其投を方お到る安房の四郡りて廣
からね一兩日中て四隅の村長社客等四圍守の
下知小くして稻村より石の韓櫃と車りて牽き來て四天の昇れて來るを俟と
四隅皆異なるが大士等各其表木あり地を穿せて天神王と素樸の厨子に
儘石の櫃を斂て是を瘞る大の教違ふと云。憊而塚と築立させ
栽る樹も折る五月雨の時候る枯る者るりけり八大士各這美を傲果しく
稻村の城へかゝ來る程ふ又念成の徒弟等と俱に佛像五十軀と鋸山へ瘞果て
延命寺へかゝ來り是より後、大禪師の連り退院と請上宗あり然義

成主已ととゆ念成と延命寺の二所の住持を一と則照書と賜り大お
別坊料を宛約ふべとありと大の固辭て取て受先退院の歎びを宣さん
と。稻村の城へ來りける折八大士うち取取ひて君邊より一が義成則。大を召
らせて對面を其礼果て、大が命。臣僧多羊の宿願を遂て富山小入りて
還らトと思へ見参の今日と涯りるべ。就て告上宗さま、思ふあり富山の品出原
伏姫神の禿倉を置て衆人小拜せぬの姫神の御本意おあら何とされ姫神は
原是富山なる觀世音の化現然に姫神と拜ま欲る衆生の富山の峰の觀
世音を詣る如く臣僧這神慮を知る故に那宸筆の勅額を山峯の背を向て
つらり。石空美藏めまりぬ今よりして後伏姫神を大悲の奥の院とて拜せらる。
利益御子孫不及せぬるべ。然に臣僧の那品出原を鎖埜に長く定不入らま
欲まといひ八大士と見りて和殿等も皆ら功成名遂て身退るの謙の上言

る者へ何ぞて見子小職を譲りて致仕して隱逸を樂まざるや。公はたの口は定る。館願くは今日より長く我身の暇を賜ふべし。とらひも託らば身と起して走りて度らり如く見ええ。忽然としてあはれりけり。義成主も八犬士も這光景も呆果て俱ふ其方と目送るの。又公ももるりける。姑且して義成主へ悔て八犬士を語らる。曩も我富山姫の勅額とて神體小く且富山なる品崖の赤倉と置。心有り何とるれば神の形質る者へ佛の則影像あり。是を天地の辟言れば神の天の佛の地へ又人身の辟言れば神の則魂の佛の則魄の如し。神の陽佛の陰陰陽の理と知らざりて。叨に祀る。淫祠へ大和なる三輪の神の只空扉門の三ふりて神殿るを見えて知るべし。有徳は今より。峯の奥の院と我姉神安居の地と。春秋毎祭るべし。這を封内なる士民を送る。徇示し絲と仰ふ。犬士も感服して猶餘談を及ひけり。公程も、大の伴當なる禪師あり。せしめ作りぬと。少知りて。驚愕に噪ぐこ

大らるらむ。躬く延命寺へ走りぬる。住持念成小告り。念成も亦驚愕して。原來師父の富山にあてて定ふ入りぬるらん。今一番對面甘き。布けれと。猛可ふ伴當と得て。富山へ赴く。路を日暮。一松。準備の井。焦火を掉照。其當晩。那品山屈ふ。走り着て見る。不怪むべし。品崖の最。凄。一般石と建。楯。其入処を塞。絶。縦。力雄の神へも。輒。開。く。ぐ。も。あ。ら。ざ。ら。ば。念。成。憶。も。嘆。息。あ。て。原。來。對。面。を。饒。さ。れ。ぎ。と。品。山。屈。ふ。う。ち。向。ひ。て。跪。たり。念。佛。して。退。り。稻。村。殿。へ。告。禀。さ。ん。と。其。方。と。投。て。い。そ。程。も。既。中。て。天。の。明。け。り。然。び。又。公。の。早。犬。江。親。共。衛。義。成。主。の。仰。ふ。と。て。大。禪。師。の。在。処。を。索。て。君。命。を。傳。ん。と。伴。當。と。從。て。富。山。を。投。て。も。程。も。途。中。念。成。小。逢。り。伴。當。の。趣。を。少。知。り。て。公。も。甲。斐。る。と。思。ふ。あ。れ。只。得。念。成。と。共。侶。稻。村。の。城。へ。か。り。あ。る。事。候。と。少。え。上。れ。義。成。則。念。成。を。召。せ。て。み。づ。く。其。委。曲。と。少。ぬ。念。成。が。公。も。那。品。崖。を。塞。だ。る。般。石。と。非。如



八代傳九輯卷五十二

十九

文溪堂藏

高天原
 大と起て
 親五衛念成
 富山小到系



八代傳九輯卷五十二

文溪堂藏

あらた
 うらたの人の
 としはれ
 ちん
 ちん

文溪堂
 蔵

文溪堂
 蔵

百千人の精力ありとも。輒く啓くべし。其大石不書寫去。歌あり。あも亦
浮世の人代訪来れば。空もく雲も身をまうせんと。讀れり。外も見る所もい
む。と。義成王打てて。古歌う。新詠う。向の。親兵衛答て。古歌を以有昔
建武の比中納言藤房卿出家。徳道の後。みづ。依山子と號して。越前守
鷹鳥巢山幽栖去ぬ。一時新田の勇将畑六郎左衛門尉時能が。其頭陣してあり
ければ。士卒水と微り難て。山深く入る程。藤房入道を見出。て。訝りて。其出処を問
ふ。實を告ぬ。只東國の者。との。谷の。ひ。か。士卒等。の。之。訝りて。軀から
未。時能。告る。不。時能。少。て。開。必。藤房入道。ふ。て。ま。へ。れ。我。我。て。見。ん。と。そ
みづ。其。地方。不。至。る。不。主。六。又。立。去。り。て。坐。一。石。不。寫。遠。去。一。件。の。歌。あり。あ。の
事物。不。見。えて。い。禪。師。は。是。を。思。ひ。を。て。其。古。歌。を。て。心。操。を。示。され。る。ふ。と。い。ふ。
考照具る。ければ。義成。の。嗟嘆。不堪。と。原。来。幾。番。訪。ふ。と。も。對。面。稱。ふ。と。ま。

と。竟。ふ。の。議。の。已。お。け。り。是。よ。の。後。富。山。入。る。者。折。々。那。品。岩。也。讀。經。の。聲。
ま。る。と。夢。と。あり。徳。而。許。多。の。年。と。麻。也。里。見。四。代。の。國。主。實。亮。の。端。像。九。集。四。十一。卷。
當。實。亮。の。作。る。べ。し。の。時。小。樵。夫。の。富。山。入。る。者。あり。一。日。一。個。の。老。僧。忽。然。と。出。々
來。て。送。小。樵。夫。と。喚。て。い。ま。う。我。の。大。禪。師。は。汝。我。為。小。柏。村。の。城。夫。多。り。て。實。亮
主。小。告。ふ。御。父。祖。の。俊。徳。稍。衰。々。内。乱。將。起。ま。く。と。宜。仁。義。忠。孝。を。宗。と。し。て
善。政。を。怠。り。ぬ。る。と。言。傳。ふ。奴。が。忘。れ。そ。と。宣。示。し。て。走。る。と。奔。馬。の。像。く。忽。地。見
え。ま。り。お。け。り。あ。れ。ど。も。件。の。樵。夫。の。言。の。思。ひ。を。憚。り。て。這。美。を。訴。さ。り。け。れ。ど。も。果
て。宅。も。違。ざ。り。け。り。あ。ら。是。後。の。話。は。是。より。先。小。大。田。典。豆。後。居。城。守。那。古。の。浦。の
一。名。を。鏡。の。浦。と。い。ふ。這。地方。の。棘。鬚。魚。の。安。房。の。名。物。を。れ。平。生。の。國。守。へ。獻。じ。て
り。と。食。膳。の。料。と。し。入。政。木。大。全。が。居。城。守。大。田。木。の。棘。鬚。魚。も。上。總。の。名。物。を。さ
ども。吹。送。け。れ。守。の。食。膳。不。備。れ。と。遮。莫。大。田。木。の。漁。夫。の。猶。誇。り。て。我。浦。の

棘こひのうを那古なこ勝まされりとのいと大田おほの豊とよ後ご守し知ちりて有あ年との春はる塩しほ鯛うなぎと政まつ木き大
 全ぜんの贈おくりるともと歌うたと詠よみて遣つらしける其その歌うた曳ひあらるま霞あせの網あみおらる浪のなみ花はなさら鯛うなぎ
 那古なこの浦うら裏つととあり一怒おこ政まつ木き大おほ全ぜんも亦また塩しほ鯛うなぎと大田おほの小こ贈おくりる歌とりて返かへし
 とま其その歌うたあの海うみ八や重への潮うしほ路ぢのさらら鯛うなぎ名な小こ大田おほの木きをうのといらん後小
 義よ成なりぬ王このと這こるを傳つとへて贈これ谷たに共とも感かん心しんのあまり冬ふゆ大田おほの木きの棘こひのうを長なが魚うををも
 食あ膳しぜん小せま備へよとと甲乙これ俱とも小こ徴ちほされか大田おほの木きの浦うら人ひと飲のみびて遂つひ小こ恒こつね例れい小こ做しり小
 けり徳而て義よ成なりの徳とく善ぜん慕ぼる近國くにの氓みづか多おほく取と取とひまて上かみ總すべの郡ぐん縣けんをま之の敏みん昌しやう
 是こらり一おか政木まつ大おほ全ぜん利り害がいと演のて請こふて処あ々くの要ま害がい小こ城ぢやうを築くと勢せきから
 此この後のち竟つひ小こ四よ十じゆ八はち个こ所ところ小こ至いたり一か世のよ人ひと相あ傳ひへる是これを里見さとの四十じゆ八はち城ぢやうといひけり
 是これらり下したへ又また本ほん回かいの下編へん小こ解と分わかると聽きねかし

南總里見八犬傳第九輯卷之五十二終

